

一生懸命に生きる

大瀬 二菜

「私は死にたくありません。私には妻がい
ます。妻のために死にたくないのです。自分
にとって命は何よりも大切です。」この言葉を
読んだとき、私は頭を打たれた気持ちになっ
た。私は無意識に軍人はみな死ぬことなんか
怖くないと思っていたのかも。軍人
も私と同じ人間だということを知っている
ように私はわかっていなかった。

日本人はみんな国のために喜んで身を捧げ
たという話は、何回か聞いたことはあつた。
私はあまり日本の戦争については読んだこと
がなかったが、学校で習ったことから大体は
知っていた。だけど全てはアメリカから見た
日本であつて、別の理由があつたのではない
かと疑問抱いていた。そもそも戦争は画像や
映画でしか見たことかなくて、私にとつては
どこか遠いところで起きた出来事に過ぎなかつ
た。そんなとき、私はこの本と出会つた。

特攻で死んだ宮部久蔵は健太郎の実の祖父
 だ。
 あいつは海軍一の臆病者だった。彼はみな
 国や家族のために死ぬ覚悟をしている中、急
 する妻のためにも自分は死にたくないと言っ
 ていたのだ。そんな人かなぜ特攻に志望した
 のだろうか。健太郎と姉の慶子と二人で宮部
 久蔵を調べるため、彼のことを覚えている人
 たちを訪ねて行った。調査を続けるうちに、
 宮部久蔵という人物がどんどん明らかになっ
 ていく。いつの間にか私は胸をドキドキさせ
 吸い込まれるようにこの本を読んでいた。
 「どんなに苦しくても、生き延びる努力を
 しろ！」震えか背筋を走った。宮部の怒鳴り
 声か真ん前にいるかのようには大きくはつきり
 聞こえた。このセリフはこの本で最も印象に
 残ったセリフだ。井崎がもし私が被弾したな
 ら潔く自爆させてくださいと言ったことに対
 しての宮部の答えである。自分が潔く死ぬこ
 とよりも、自分が死ぬことによつて家族や友

人などかどれだけ辛い思をするかということ
 を伝えたか。たのだろう。私はいまさらなが
 らに、一つの命の重さを気付かされた。
 井崎はマリアナ沖海戦で燃料タンクを撃ち
 ぬかれ、帰還は無理と考えて体当たりをしよ
 うと思つた。だけどその時宮部の声か聞こえ
 て井崎は敵機をはぐらかし海に不時着し、グ
 アム島まで泳ぎ助かつたのだ。もし宮部に合
 つていなかつたら、井崎は自爆をして生き残
 ることは出来なかつた。健太郎も、諦めかけ
 ていた弁護士の夢にもう一度挑戦しようと思
 強をするようになつた。慶子も結婚しようと思
 思つていた男の人を断つて大好きな人と結婚
 することを決意した。宮部自身は救つていな
 いかも知れないか、井崎みたいに宮部の言葉
 に救われた人がいる。彼の行動は健太郎や慶
 子も変えた。宮部さんの思いは世代をわたつ
 て人に影響を与えたのだ。
 特攻に行くとき、宮部は乗つていた飛行機
 を大石と交代してなんと宮部は飛行機の工ソ

ギョートラブルに気づき、生き残るチャンスは
 大石に渡したのだ。最後の最後でなぜ宮部は
 死ななければいけないかわつたのだろう。私はあ
 まりにも悔しさと悲しさに涙が溢れ出した。
 宮部は大石に一回交換を断固拒否され、一度
 飛行機に戻ってしばらくそこにいた。彼の中
 に生き残りたいという気持ちかまだあつたか
 らかもしれない。宮部が必死に大石を説得す
 る姿が私にはその気の迷いを押し殺して自分
 の欲望と戦っているふうに見えた。心の中で

飛行機を交換しませんようにと必死にさげん
 だが、結局大石に渡ってしまい、悲しく切な
 くなりました。もしかしたら大石に敵飛行機
 から助けをもらつた恩返しをしたかつたのか
 もしれない。どちらにしろ、宮部が妻の顔が
 見えることが出来なかつたのは本当に悔しかつ
 た。

特攻によつて死んでいった人はいい
 て、みんな特攻に行くとききつと愛する家族
 を守るためなら、愛する故郷を守るためと思

だのだろう。日本人は家族を守るとい
 持ちが強いから特攻が出来たのだと思
 し私か特攻に行けと言われたら行ける
 うか。アメリカやニューヨーク人は戦
 で自分の命を優先するのではないだろ
 べつに悪いことではないか、日本人の
 命さに私はかっこいいと思いい、同
 あることが嬉しかった。だけど戦争
 すごく厳しかった日本も、今の時代
 くあまくなっている。私も含めて戦

た人たちの勇気や何かに対しての熱
 は失いつつあると思う。私も一つ
 意をもったことはない。勉強や習
 部中途半端な気持ちでやっていた。
 か情けなくて、同じ日本人として恥
 とも思った。
 戦争をあまり知らなかった私は、本
 終えて戦争というものは、きりわ
 思う。目の前で人が死んでいき、自
 うとしている敵も人間で大切な人か

いる。多くの人が死んでいくところを想像し
 した時、恐怖と怒りがこみ上げてきた。戦争
 は二度とあってはならないと思った。毎日平
 和で明日が当たり前にある私でも、戦争の残
 酷さが伝わってきた。私は日本人として、こ
 のままではいけないと思って自分の生活を振
 り返った。適当にこなしていた宿題たち、姉
 に押し付けていた家事の手伝いなど、なまけ
 ていたものが数えきれないほどあった。すこ
 しずつ私は家事の手伝いをして、宿題たちを
 きちんとするよう努力をした。私は宮部久
 蔵のような勇氣はないけれど、戦争で戦った
 人たちに負けないぐらい一生懸命に生きたい
 と思う。